Next is us

日体魂の聖火リレー
～日体魂を受け継ぐ者～

15

ソフトボール男子

小山 玲央

エースとして大学選手権を3連覇
世界選手権でも過去最高の準優勝に貢献
卒業後は日本リーグでの活躍を誓う

怪我や悔しい経験、その全てをバネにして、世界のトップが見えてきた

――ソフトボールが盛んな環境で育つ

小学校1年生の時に同級生から「一緒にソフトボールをやらないか?」と誘われ、地元のクラブチームに入ったのが競技を始めたきっかけです。出身である長崎県の小学校ではソフトボールが盛んで、野球よりもソフトボールをやっている子供の方が多いくらいでした。ただ中学校ではソフトボール部がなく、野球部に入りました。

当時はソフトボールは小学校まで、将来はプロ野球選手になりたいと思っていたので、そのまま行けば高校でも野球部に入っていたでしょう。高校で再びソフトボールをやることになったのは、小学校の時の恩師に声をかけて頂いたからです。その方が、全国制覇の実績がある佐世保西高校の監督と知り合いだったのです。それならば高校での3年間、ソフトボールに打ち込んでみるのもいいなと思って進学を決意しました。

――高校時代、思い出すのは惜しさ

高校では全国総体での優勝などもしましたが、思い出すのはむしろ悔しさです。

まず1年生の冬、指を骨折して練習できない時期がありました。仕方なく毎日走ったり、下半身を強化するなどの基礎トレーニングに励んだ結果、春先の成績がぐんと上がりました。振り返って見れば、怪我して良かった面もあります。

高校1年の春の選抜をかけた県予選の決勝も忘れられません。先発するも初回に5点を取られてコールド負けを喫しました。自分としては十分に仕上げてきて、相手を抑える自信もあったのに打ち砕かれ…。しかし今となっては、あの試合でのショック、悔しさがあったからこそ、今の自分があるのだと思えるようになりました。

――ソフトボールと野球との違い

一見すると似ているソフトボールと野球ですが、実際に競技をしてみると違いもあります。一番の違いは、塁間の距離です(野球の塁間は27・431m、ソフトボールの塁間は18・29m)。塁間が近いためボールを取ってから投げるまでのスピードが早く、ピッチャーからキャッチャーへの距離も近いため(野球は18・44m、ソフトボールは男子が14・02m、女子が13・11m)、ボールの体感速度は野球以上。男子ソフトボールではその特有のスピード感も野球にはない魅力です。

――武器はカットボールとライズボール

下から浮き上がって来るボールをライズボールと言い、自分の決め球にもなっています。ボールに上向きの回転をかけることで、浮き上がっているように見える投球です。ただ自分は小学校の頃は投げられず、高校でも浮き上がるボールを投げるまでには、かなりの時間がかかりました。

スピードが出るのはカットボールです。これまで投げた中で最も速かったのは、世界選手権で出した135キロ。これは世界最速の部類です。それでも海外の強豪を相手にすると、結構打たれてしまいます。

――男子の日本代表の一員として

これまで男子のトップは、5位入賞より上に行けない「5位の壁」が続いていました。しかし去年、参加させて頂いた世界選手権では過去最高の準優勝を達成。世界一を狙える位置まで来たと肌で感じました。

ここで世界のトップレベルの選手たちと対戦できたのも、競技人生における大きな経験です。日本と違って海外のバッターは〝打って打って〟のような強攻が多く、パワーで詰まってもいい所に持っていかれる怖さがあります。ブンブン振り回してくる相手には、ボールの速さに加え、緩急やコントロールを付ける対応が必要です。そうして力を出し切れば、自分のボールが世界に通用すると思えた大会でした。

[男子ソフトボールに注目!]

今、日本はアンダー18チームが世界大会で優勝したこともあり、世界ランキングの一位です。他の競技同様ソフトボール人口も少なくなってきてはいますが、その中でも何とかメジャーにしたいという思いで選手も含めて頑張っています。

◆プロフィール
小山 玲央(こやまれお)
長崎県佐世保市出身、長崎県立佐世保西高校卒。小学生からソフトボールを始め、佐世保西高校では全国総体で優勝を果たす。日体大に進学し、1年生から活躍。2年生の全日本総合選手権では史上初の大学生チームの優勝という快挙を成し遂げる。男子ソフトボールの日本代表チームにも招集され、世界選手権では過去最高となる準優勝に大きく貢献。在学中は全日本大学選手権(インカレ)を3連覇。最後の年はキャプテンとしてチームを引っ張り、中止となったインカレの代替大会にも優勝。連覇の更新を後輩に託し、自身は日本リーグの強豪である平林金属株式会社で新たな活躍を誓う。